

# 大被害を受けた 道産野菜の動き

この夏、北海道が有史以来の大被害に見舞われた。5回とも6回ともいえる台風被害、とくに豪雨が川を氾濫させ多くの圃場を水没させた。コメをはじめ収穫間近のジャガイモ・タマネギ、ピークのシーズンに入っているニンジン・ブロッコリーなど、北海道の夏秋野菜には、代替できる大型産地がほと

んどない。そんななかで、現在（9月上旬）の市場入荷状況はどうなっているのだろうか。ジャガイモにはでん粉用もあり、それが生鮮用にどこまで振り向けられるかはまだ不明だが、タマネギは輸入量が史上最高になることだけは確実だ。今回は直近データをもとに道産野菜の動向を探る。

## ジャガイモ類

**入荷ピークに大影響。加工需要は輸入、小売用はひっ迫**

【概況】

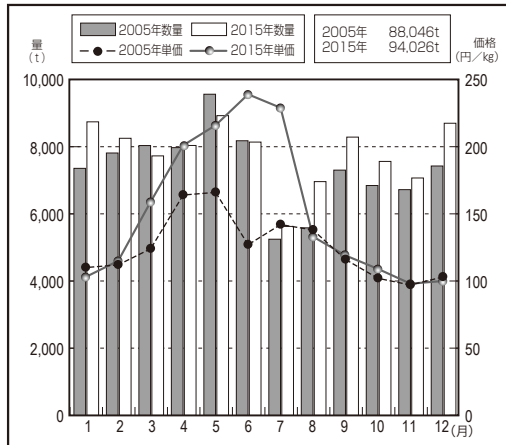
東京市場へのジャガイモ類の入荷は、この10年で7%増えて単価は20%も高くなった。これは全体の6割を占める北海道産が増えているため。入荷ピークである10月が変わらず99%が北海道産で、ピークが始まる9月の道産は、かつてシエア9割強、2015年にはほぼ100%と独壇場である。今年の8月も、例年のようにシエア8割、入荷量前年比7%減程度だったが、9月上旬になるとやはりガタンと減ってきた。

【背景】

主に8月にたびたび被害を受けた北海道産は、9月上旬になると入荷量は前年比13%減、単価は4割も高い。とくにメークインは半減近く、同様に高騰しはじめた。道産ジャガイモは、蔵入れが始まる10月末ごろには生鮮向け出荷予定量の見通しがつくもの。しかしすでに収穫しながらも、品薄を見込んで貯蔵しながらの様子眺めも増えている。東京市場では、道産が不足のため普段は入荷もない茨城・千葉・長崎・栃木などからも集荷に走っている。

【今後の対応】

タマネギと異なり、国産が品薄だったら輸入すればいいという品目ではない。いま輸入が許されているのは、冷凍品が生鮮品でも、上陸から工場まで密封したトラック搬送しているカルビーの一部工場だけ。これから10月に向けて入荷はどんどん減ってくるはず。業務用需要の一部は、確実に輸入の冷凍やドライポテト（乾燥品）で代替するが、圧倒的大産地の道産がこれだけ史上初の大被害を受けると、この秋冬マーケットがどうなるかわからない。



## タマネギ

**秋冬は道産が独壇場状態。**

【概況】

東京市場のタマネギは、05年対15年で見ると数量は2%と微増だが単価は16%程度高い。かつて7~8月は泡沫産地だった北海道もいまや8月には6割弱を占め、年内は独壇場。九州産が本格化する春先まで出荷は続く。それが今年9月上旬には前年より12%少なくシエアも8ポイント減。この穴埋めには、前年より3倍も入荷した中国、3割増やした兵庫、昨年は実績さえなかった米国産も入っている。

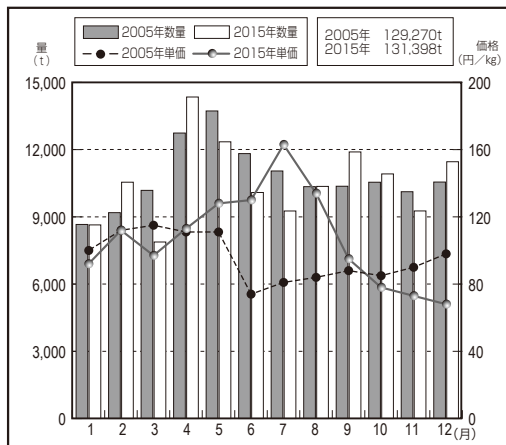
【背景】

今年はタマネギにとって受難の年になった。8月までの春夏産地の佐賀ではべと病が大流行し、全体の6割を占める北海道産がご覧の有様だ。とりわけ全国の2割を占める大産地・北見市では、8月の台風の上陸と豪雨で、2500haの収穫直前のタマネギ・ジャガイモ畑が冠水した。昨年の道産の入荷実績では、9月以降は97%前後で推移する絶対産地である。それが今後、九州産が出る3月まで、どのくらい入荷減となるか予想もつかない。

**影響は一部産地のみ？**

【今後の対応】

北海道の被害の全容はまだ明らかではないが、実際は全体に占める被害の割合は一部で、長期的には品薄も解消されていくというのが農水省の観測。青果卸売会社でも、入荷は減るだろうが価格は2割前後の高値で収まるだろうと見ている。青果物は水と逆で、低いところから高いところに流れる。そのため、東京市場では各地から供給され、それほどの入荷減とならないだろう。加工業務需要は国産がないから輸入を増やすだけである。



# 今年の市場相場を読む

前年ペースが9月に2割減。輸入依存をなんとか国産で

## 【概況】

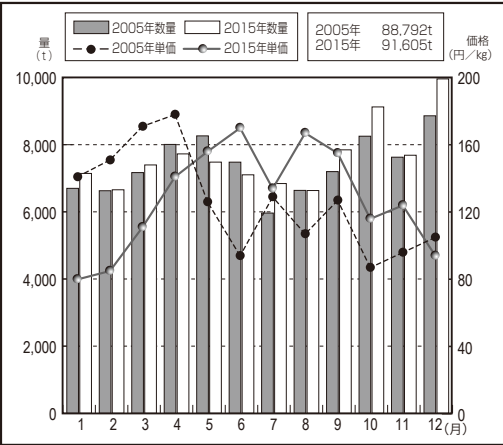
東京市場に入荷するニンジンはこの10年を対比すると、入荷量3%増、価格2%高と、ほぼ変わらないで推移してきた。道産のシェアは、7月3割程度、8〜10月は9割以上、中心の9月は98%の独壇場である。今年は、7月はシェアを7%程度落として入荷量は32%の減。続く8月になるとシェアは3%程度落としたが入荷量は2%減と、スタートは例年どおり。それが9月上旬には前年より2割も減つて5割高だ。

## 【背景】

9月の道産ニンジンが入荷減をカバーしているのは、前年より4倍の数量が入った中国産、青森も残量を出してきたという感じで、これまでほとんど実績がなかった埼玉・群馬からも。今後ピークのはずの10月には、道産は大幅な入荷減となるだろうが、11月以降は徐々に関東産地に戻っていくので、それほど影響は大きくないと見る。加工業務需要者は輸入品を中心に手当てするだろう。これもまた相場的にはそれほど高騰しないという推測の根拠だ。

## 【今後の対応】

道産ニンジンが大きな被害を受けても、それほどひどい迫感がないのは、むしろ残念である。その理由は、近年ではニンジンの輸入がコンスタントに8万〜10万tもあり、国産の増減をカバーできる体制が整っているからだ。ニンジンは土の中で育つ土物で、一般に土物は気象条件に鈍感だ。しかしニンジンだけは例外で、生育が葉物並みに天候に左右される。これだけの輸入があるのだから、もっと各地でニンジンの作付けを増やすことができないか。



## ブロッコリー

道産は10年前の2・5倍。品薄なら各地から支援増も

## 【概況】

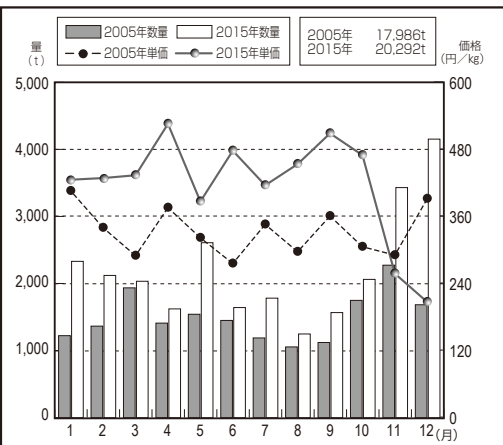
東京市場へのブロッコリーの入荷は、この10年で46%も増え、単価も17%高くなった。とくに道産は2・5倍も増え、シェアも9%から15%に拡大。とくに夏場のシェアは7月59%、8月76%、9月65%と、夏場の主産地だった長野産の出荷と重なり、さらに遅くまで出る産地として急激に伸びた。今年は7月には前年並みであったが、8月は全体が8%伸びるなか、入荷は前年並みでシェアは7ポイント落とした。

## 【背景】

9月上旬には全体的に入荷量が1割近く増えたのに、ピークに入るはずの道産が、台風などにより被害が大きく数量が期待できない、という観測があったからだろう。それをカバーしようとしたのは前年の2倍の数量を出してきた長野産、オーストラリア産も前年の3倍、青森産は同4倍の入荷だ。近年、11月以降の冬春産地である関東の埼玉、東海のアシタカが出てくるまで、道産の出荷が継続されるといって、頼もしい大型産地となっていた矢先のことだ。

## 【今後の対応】

北海道には、一人として日本一という生産者がいる。それは、全国に6カ所の直営農場を持つドールだ。近年国産のブロッコリーの伸びは北海道がけん引してきたが、なかでも影響力があったのは、自社輸入分のかんりの部分を、国内の自社農園に移す「国産化」を積極的に推進してきたドールだ。ドールは北海道の後には長崎五島の農園にチェンジしていくが、今年は他の農園からの出荷を意図的に増やして、品不足解消の手伝いをするだろう。



流通ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙「新感性」、月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」「レポート青果物の市場外流通」「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。